



Title	石濱文庫拓本資料調査の概要 : 2006年度前半まで
Author(s)	堤, 一昭
Citation	大阪外国語大学論集. 2007, 35, p. 181-192
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80019
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

石濱文庫拓本資料調査の概要 —2006 年度前半まで—

堤 一 昭

Rubbings of Steles in the ISHIHAMA Collection — A Progress Report

TSUTSUMI Kazuaki

【はじめに——石濱文庫の拓本資料とは】

中国・日本ほかの漢字文化圏において、拓本は書道鑑賞・研究、歴史研究のための資料とされてきた。特にもの石碑や青銅器などに紙を直接当てて採った拓本は「原拓」と呼ばれ、現在にいたるまで単なる資料として以上の価値、美術品の一種としても尊重されてきた。

また歴史研究でも拓本は重要視されてきた。碑や墓誌銘などの石刻、青銅器に刻まれた金文から歴史を研究する学問は「金石学」と呼ばれ、清朝の乾隆時代（18世紀後半）の錢大昕らの時期に頂点を迎え、その後まで含めて大量の研究がなされてきた。その成果は王昶『金石萃編』・錢大昕『潛研堂金石文跋尾』等を始めとする金石書（石刻に関するものの方が多く、それらは石刻書）と通称される膨大な文献群として残され、石刻・金文の研究の際にはまず参照されるべきものとなっている。この「金石学」において、拓本は石碑などの原石・青銅器の器物そのものと共に重要な研究の手段となってきた。現在でも、石刻研究では原石・拓本・原石の写真・拓本の写真「拓影」の四者を併用して研究するのが常である。多く現地にある原石を確認することは頻繁にできることではないし、その表面が荒れていれば文字を読みとることが意外と難しい。原石の写真も光線の状況次第で必ずしも鮮明に見えるとは限らない。刻まれた文字や画像を読みとる際に拓本の方が勝ることもよくあることである。まして、原石が拓本を採った後に風化したり亡失している場合には、拓本が唯一の資料となるのである。

ところで、本学附属図書館所蔵の特殊文庫に石濱純太郎博士（1888～1968）の旧蔵書「石濱文庫」があることはよく知られている。4万冊あまりの膨大な量と高い質の東洋学の図書として紹介されるのが常である。だが図書以外にも、今回取り上げる拓本やその他写真・研究過程を示すノート、書簡などの研究資料も多数含まれている。こちらは、図書ほどは知られていないようである。

後に述べるように「石濱文庫」の拓本は、1300 枚以上の大部分が「原拓」である。書道鑑賞・研究、歴史研究の両面において重要な研究資料である。この拓本資料は、これまで十分な調査・整理が行われていたとはいいがたい状況にあった。筆者は 2004 年度から徐々に調査を進めており、2006 年度前半までの調査の概要をここに報告する。今後この資料をどう調査・整理・研究・公開して活用していくかを考えるための材料となれば幸いである。

【2004 年度（平成 16 年度）の調査】

（1）拓本資料の展示・整理のありかたについての調査

筆者は 13～14 世紀の「モンゴル時代」（東アジアにおいては「大元ウルス」（いわゆる元朝期））の中国史の研究にたずさわっている。この時代の研究、とくに現在の中国地域での歴史研究には石刻が極めて重要な史料となっている。またこの時代の研究者以外には意外と知られていないが、13～14 世紀「モンゴル時代」の中国では、北朝から隋唐時代と並んで、いやはるかに上回る石刻が多く産み出され、それらの多くが今なお各地に現存している。従前から、現地での石刻そのものや拓本資料を見る機会があり、多くの石刻書を座右に備え、石刻史料を研究に利用したこともあった。そのためには、石刻や拓本についての基本的知識も必要となる。加えて「書」の美術としての拓本にも関心があった。

したがって、後にふれる石濱文庫の目録中の拓本図版・記述には、大阪外国語大学に赴任する以前から注目し、実見したいと思っていた。1996 年の赴任後も、図書館の貴重書庫の中にあるため、じかには見る機会はなかったものの「石濱文庫」のより良い保管や公開のありかたについて常々考え、他の拓本収蔵機関がどのような方法を採用しているかを知る必要を感じていた。

その中で、2004 年春に日本を代表する東京の三つの拓本収蔵機関、財団法人三井文庫の別館・東京国立博物館・台東区立書道博物館が、「拓本—3 館同時開催による名品展—」を開催した。筆者は 5 月 28 日～29 日に参観する機会を得て、各館の拓本収集の概要、解説文の付け方などの細事まで含めた展示のありかた、また図録の編集方法や研究紀要に見られる研究の方法について調査した。

さらに 2005 年 3 月 28 日には、東京国立博物館が保有する図書・古文書・写真を中心とする学術資料を公開する「資料館」を訪ねた。同館が明治以来収集・蓄積してきた書跡（拓本以外の真跡・印章・印譜を含む）がどのようなものがあり、それがどのように目録に記載されているか、また書跡の写真資料がどのような形で整理され、閲覧や原版使用などの公開の方法・手続きについて調査することができた。

（2）石濱文庫拓本資料調査の開始

以上のように拓本資料の展示・整理のありかたについての調査を進めつつあった 2004 年 9 月に本学附属図書館に貴重図書問題専門委員会が発足した。筆者も委員として参加することになり、「石濱文庫」が置かれている貴重書庫に入っての調査が可能となった。

この委員会は、もとは附属図書館のより広い開放によって貴重図書の無制限な館外貸出の防止を検討するために設けられたものだったが、発足後に貴重図書の選定基準の検討が始まった。貴重書庫内外の「貴重」図書の選定・区分と整備の必要性が認識され、後に「石濱文庫」も対象に加えられた。

筆者はおもに漢籍についての調査を担当することになり、始めは一般書庫の「旧分類」（前身の大阪外国語学校・大阪外事専門学校から引き継いだ図書）中の、帙入り糸綴じの和書・漢籍が混在する一角¹から手をつける予定でいた。ところが、貴重書庫に入り「石濱文庫」を一覧して、拓本資料を調査・整理することが焦眉の急務であると痛感した。

「石濱文庫」の和漢洋の図書は分類に従って整然と書架に並べられているのに対し、それ以外の拓本・写真・ノート等の資料類・書簡類は、整理途上ないしはこれからの整理を待つ段階にある。特に拓本は一点一点封筒に入れられて書架にあるもののほか、むき出しのまま他の場所に置かれているものも認められた。保存の観点からも早急に調査を開始する必要を感じたのである。

【2005 年度（平成 17 年度）の調査】

（1）調査の目標と成果報告：

2005 年度に入り、「石濱文庫」の拓本資料に焦点を定めて、調査の最初の目標を概要の把握とした。具体的には、第一に拓本資料のおおよその分量・書庫中の所在・資料の性質を明らかにすること、第二には、次に述べる『石濱文庫目録』編纂時の拓本調査の性質を明らかにすること、第三には、筆者がたずさわる「モンゴル時代」の拓本がどのくらいあるのかを明らかにすることであった。

7 月末から作業を開始して 3 月まで、のべ 20 日あまりを図書館・研究室・他大学図書館での調査に費やした。そして年度の調査結果を二つの報告にまとめて公表した。「石濱文庫の拓本資料——概要とモンゴル時代拓本一覧」²であり、より一般向けには「石濱文庫の拓本資料」である³。第二にあげた目録編纂時の調査の性質についての考察は、貴重書庫内での現物調査のために先に行う必要があった。上記の報告と一部が重なるが、考察結果を次に記す。

（2）目録二種の記載内容の分析

譲り受けられてから十年の歳月をかけて整理された文庫目録、『大阪外国語大学所蔵 石濱文庫目録』には同名の二種類の刊本がある。1977 年（昭和 52 年）3 月発行のもの（青色の紙装丁。以下「目録 A」）と、1979 年（昭和 54 年）3 月発行のもの（布貼り装丁で箱入り。以下「目録 B」）である。本学はじめ諸大学図書館等に備えられているのは後者である。この二種の目録中、拓本資料は以下の箇所に記載されている。

- 「目録 A」：①「漢籍の部」（62 頁）C 子部 第九藝術類 一書画之属 拓本 [17 タイトル（18 タイトル載るが、1 タイトルは次の篆刻之属に属するもの）]；②「写真の部」図版 pp. 435－471, p. 478 [下段に画像石の拓影], p. 491 [下段に契丹文字資料]

●「目録 B」:①「漢籍の部」(76～77 頁) C 子部 第九藝術類 一書画之属 拓本 [24 点]; ②「写真の部」図版 pp. 434-455; ③「写真の部」目録 pp. 492-500 [写真図版 (p. 492)・写真・影印本も含めたリスト。全 161 タイトル。うち原拓と思しきもの 126 タイトル。1 タイトルに相当点数の拓本を含むものあり。]

「目録 B」は「目録 A」の増補改訂版と考えられるが、拓本資料の記載についていうと関係は単純ではない。①「漢籍の部」の記載は「目録 B」が「目録 A」のものを全て含むので、「目録 B」のみを参照すればよい。だが、②「写真の部」図版は両目録の体裁は異なり、「目録 A」のほうが所載点数がかなり多い。両目録の図版とも参照する必要がある。③「写真の部」目録は「目録 B」のみである。

以上の A・B 両目録中の上記箇所に基づき、資料の種別や時代等によって、まず以下のような仮の分類を試みた。分類無くしては、拓本の整理はなし得ないからである。普通の図書・漢籍とは異なり、金石には標準となる分類基準は必ずしも確立していない。また、石濱文庫の拓本の実態にあった基準でなければ、その後の整理作業の役には立たないのである。

1. 漢代から唐代の名碑, 2. 法帖, 3. 龍門石窟の造像記, 4. 北朝隋唐の墓誌銘, 5. 非漢語刻文のものを含む石刻群 (1) 契丹文字哀冊 (慶陵出土), (2) 女真文字石刻 (大金得勝陀碑ほか), (3) モンゴル時代石刻 (蒙漢合璧碑・居庸関石刻ほか), 6. 石経, 7. 漢代画像石, 8. 金文・銅鼓など青銅器, 9. 日本金石文, 10. その他。

つぎに各分類において、おおよその分量はどのくらいか、主なものが何かを調べ、目録の「漢籍の部」「写真の部」(図版・目録)の記載事項から編纂時の拓本調査の性質を検討した。

その結果、目録記載分だけでも分量は 800 タイトル以上に上ること、石濱純太郎博士の研究分野を反映して、点数こそ少ないが 5. 非漢語刻文のものに著名な石刻の拓本があることが判明した。約 30 年前に編まれた目録は、拓本資料に関する限り、漢籍のように依るべき他の目録もなく、調査のために必要な文献も参照し得ない困難な条件下で作成されたものと判断された。次に述べるように目録に載らない拓本が書庫内にあったことから、拓本すべてを網羅したものではないことも分かった。また写真図版とキャプションのずれから、恐らく時間的にも切迫したなかでの作成であったと推定された。一枚一枚を抜けて見ることから始まる拓本整理はきわめて時間のかかる作業であり、目録記載の一つ一つを見るとその大変さがひしひしと伝わってくる思いもした。そして、石刻書などの参照が容易になった現在、この目録中の成果から出発できることに感謝すべきと感じたのである。

(3) 貴重書庫内での調査

貴重書庫内での調査では、まず拓本資料のおおよその分量・書庫中の所在・資料の性質などの概要を明らかにしようとした。目録に載る既整理のものはどこにあるか、載らない

未整理のものがどれくらいあるのか、拓本は「原拓」なのか模拓・写真などの複製なのかを把握することにつとめた。

その結果、貴重図書室内の各処に分散して置かれていること、目録に載らない未整理の拓本が相当数あること、そのなかには保存状態が懸念されるものもあることが分かった。そして、既整理・未整理のすべての拓本をまとめて置く必要、整理・保存のための方法を考えていく必要を感じた。調査の結果から、すべての拓本を収めるのにどんな文具がどのくらい必要なのか（A3判が入るいわゆるデスクトレイ 40 箱分と推定した。）、ほかに必要な道具（カメラ・メジャーなど）が何かを検討した。

平行して、先の仮分類の 5. (3)、筆者がたずさわる 13～14 世紀の「モンゴル時代」の拓本に限定して調査した。どんなものがあるのかを把握し、1. それぞれの正確な題名を特定すること、2. 関連する資料（石刻書・研究）の主なものを挙げて、今後の諸家の調査・研究に役立てること、3. その拓本の価値・意義を示すことにつとめた。今後、他の分類の拓本資料を調査していく際のモデルを作ることを意図したものであった。

結果を先述の「石濱文庫の拓本資料——概要とモンゴル時代拓本一覧」の後半に記した。9 タイトル 24 枚で、年代順に、一「加封孔子制詔碑 碑陰」、二「全寧路新建儒学記」、三「張公先徳碑」、四「張氏先塋碑」、五「達魯花赤竹君碑」六「居庸関石刻佛経」、七「莫高窟造像記」、八「勅賜大司徒寿公碑 篆額」、九「房山十字寺石刻」である。

これらの特徴は一つの石刻に漢字だけでなくモンゴル文字ほかが刻まれるもの、またはそれに関連するものが主であることで、石濱博士は多言語・多種文字の石刻歴史的・研究史的に重要なものを特に選んで所蔵されていたと思われる。すべて原拓である。

漢文モンゴル文合璧のもの 2 点（四「張氏先塋碑」、五「達魯花赤竹君碑」）、その 2 点と密接に関わる漢文のものが 2 点（二「全寧路新建儒学記」、三「張公先徳碑」）。ランチャ・チベット・パスパ・ウイグル・西夏・漢の六種の文字で陀羅尼経典類を刻んだものが 2 点（六「居庸関石刻佛経」、七「莫高窟造像記」）。十字架の周辺にシリア文字が刻まれたものを含む、九「房山十字寺石刻」。漢文のみの一「加封孔子制詔碑 碑陰」も本来碑陽（拓本は非所蔵）の上部がパスパ文字漢文・下部が刻まれるものであった。

【2006 年度（平成 18 年度）前半までの調査】

（1）調査の目標と実施

2006 年度は、昨年度までの調査を承けて三つの目標を設けた。第一は未整理拓本の調査であり、第二は既調査分も含わせてのおおよその整理と把握、第三は今後の整理・調査・保存・研究・公開のありかたの検討である。調査のために、A3 判が入るいわゆるデスクトレイ 40 箱、襖付き封筒 400 枚はじめ調査に必要な道具（カメラ・メジャーなど）は基盤研究費で調達した（堤の年度研究計画の一つでもあるため）。

第一・第二目標の作業により、拓本資料全体を実態に合わせて再分類し、分類ごとの点数を把握し、書庫中の一箇所にデスクトレイに分類して設置する。各分類がどのくらいあ

るのか、「名品」が何かをつかむことを目標とする。拓本一点一点について、題名・著／書者・立石年代を明らかにしていくべきだが、全体の分量が既整理分の 800 タイトルを大きく超えることが昨年度分かったので、全点の解明は将来のステップと判断した。ただ、明らかに原拓でない複製品を分別することに心掛ける。

第一・第二目標の作業は 7 月 26 日に開始して 10 月 30 日までの間の、18 日あまりを主に図書館内での調査に費やしてきた（日により時間は異なる）。拓本資料を館外に持ち出さないためである。酷暑の季節で貴重書庫内はおそらく摂氏 36 度以上にもなり軽装でも辛かったが、現物の調査であるためにそれ以外の場所ではなし得なかった。ようやく、未整理拓本も含めて拓本資料全点をデスクトレイに収めて後の 8 月後半からは、空調のある企画室で作業することが可能になった。未整理拓本の中から新たな「名品」の発見もあり、既整理拓本からも、仮の題名がつけられたものや不明とされたものの中に「名品」が発見されて感動する機会にも恵まれた。図書館の閉まる夕方からは、研究室内で石刻書の参照やインターネットを使った関連事項の調査に努めた。

第三の整理・調査・保存・研究・公開のありかたの検討のために、5 月 18 日に財団法人東洋文庫に赴いた。所蔵の 3000 タイトル近くの拓本についての『東洋文庫所蔵中国石刻拓本目録』（131+32p.）が 2002 年に発行されており、その所蔵内容からも範となると考えたためである。急な来訪であったにもかかわらず整理・目録刊行に関わった図書部の中善寺慎氏から直接ご教示を受けることができた。さらに数点の拓本を閲覧して公開の実際を知ることでもできた。

(2) 前半までの調査結果概要

ここに 2006 年度の 10 月 30 日までの未整理拓本調査と既調査分も合わせた把握の結果を報告する。10 月末の本学『論集』第 35 号原稿メ切までの最も新しい結果を盛りこむため、作業の途中の報告となることをお許しいただきたい。

目標とした、未整理拓本の調査を終え、既整理分と合わせて拓本資料全体の実態に合わせた新たな分類を行った。また拓本資料全体を分類ごとにデスクトレイに収め、書庫中の一箇所に設置する作業が完了した。分類ごとの点数を数える作業は下記の分類の 5. (1) の途中で、1100 枚以上。5. (1) 以降は概数であるが、全体で 1300 枚は超え、ほとんどが原拓である。ただし、十数枚かで 1 タイトルという場合もあるので、総タイトル数は 1000 を下回るかも知れない。また各分類での「名品」については、完全ではないがある程度は把握し得た。原拓か複製品かが判別しがたいものもあった。

なお、未整理拓本の整理に当たっては、同一碑の碑陽・碑陰などまとめるべきものは、同一封筒に入れ、さらに書簡・メモなど拓本入手の由来がわかるものがある場合には該当する拓本と同じ封筒に入れることに注意した。

未整理拓本と既整理分を合わせ、新たに立てた分類は以下の通りである（分類名の後の数字は拓本枚数。上述のように 5. (1) 以降は概数）。楊殿珣『石刻題跋索引』の分類を参考とし、石濱文庫拓本資料の実態と特徴に合わせた。

1. 法帖（剪装本の碑拓を含む） [7枚 + 28 タイトル]
2. 画像石 [23 枚]
3. 造像記 [861 枚]
4. 墓誌銘 [46 枚]
5. 刻経
 - (1) 儒教 [157 枚 + α]
 - (2) 仏教 [13 枚]
 - (3) 道教 [6 枚]
6. 非漢字刻文のものを含む石刻群
 - (1) 契丹（遼） [6 枚]
 - (2) 西夏 [3 枚]
 - (3) 女真（金） [8 枚]
 - (4) モンゴル（元） [24 枚]
 - (5) 満洲（清） [9 枚]
7. その他の石刻 [15 枚]
8. 印・硯・鐘銘ほか石刻以外 [28 枚 + α]
9. 日本金石文 [19 枚]
10. 未詳・不明（分類すべき箇所が分からないもの）
11. 複製（影印など）

以下、各分類の概容、分量、その中で判明した「名品」について紹介していきたい。

【1. 法帖（剪装本の碑拓を含む）】

ここには、法帖・碑拓含めて折り本仕立てにしてあるものがほとんどである。既整理分はおおよそ 28 タイトル。『大阪外国語大学所蔵 石濱文庫目録』A・B の「漢籍の部」C 子部 第九藝術類 一書画之属 拓本の箇所に載るものがここに属する。目録で「王羲之行書帖」とされていたものは、西安碑林に現存する名碑「興福寺断碑」（唐・開元九年（721））と判明した。多くが原拓と思われるが「唐孫過庭書譜」「周顒単騎將軍鞏君墓誌銘」「大学」「草書今文孝經」は明らかに複製であるため、分類・配架を改める必要がある。また「絳帖」は、十二巻の所謂「偽絳帖」と称されるもののようである。

未整理拓本からは 4 タイトル 7 枚がここに属すると判断した。「雁塔聖教序」「唐故中大夫渤海高府君墓誌銘」と「蘭亭序」2 種である。蘭亭序の一つの末尾には「（清）咸豐十一年三月孤子毓麟謹誌」とあり、もう一つは 18×10cm の小字のものである。

「禮器碑」「置百石卒史碑」「曹全碑」「韓仁銘」「王羲之書千字文」「敬史君碑」「鄭文公碑（鄭義下碑）」「道因法師碑」「雁塔聖教序」「孔子廟堂碑」など名品ぞろいであることは、『石濱文庫目録』の該当箇所や未整理分からの発見から見ても明らかである。この分類に属するもののうち 11 タイトルは「大村楊城旧蔵曾属小早川獨醒今婦石濱氏」の朱印が捺

され、漢学に造詣の深かった明治期の軍人・大村楊城（1846～1913）旧蔵と判明する。小早川氏については未詳である。惜しむらくは大村旧蔵のものも含め、この分類の法帖は虫害が甚だしいものが多い。早急に保存・修復処置を施す必要がある。

【2. 画像石】

漢代の石造の闕・祠堂・墓室の壁に彫られた画像・文字の拓本。2種類、23枚ある。2種類どちらも原拓と考えられ、拓本そのものの状態も良好である。

一つは山東省「武梁祠画像石刻 許寶衡」と題された封筒に入る9枚で、後漢・建和元年（147）のもの。石濱に贈られた際の書簡が付随する。もう一つは未整理拓本から発見されたもので、河南省の嵩山「少室石闕」（後漢・延光二年（123）刻）の14枚。どちらも書道・美術史上著名なものである。

【3. 造像記】

ほとんどが河南省洛陽南郊の龍門石窟の北魏から唐にかけての造像記（壁面に彫られた仏像造立の際、由来・祈願者など関係者名・年月を傍らに刻んだもの）である。未整理から判明した分も合わせると861枚が確認され、石濱文庫拓本資料中の約三分の二を占める最大のまとまりである。すべて原拓で状態はいずれも良好で美しい。龍門石窟造像記の名品、「龍門四品」「龍門二十品」「伊闕仏龕之碑」は全て揃っていると思われ、美術コレクションとしても価値が高い。今後、水野清一、長廣敏雄著『龍門石窟の研究』（1941）の造像記目録、曾布川寛編『龍門石窟石刻集成』（2000）等と照らし合わせて、一点一点を特定する作業が必要である。

746枚が一つの箱に収められたものが、目録では「龍門山碑文」とのタイトルで載せられていた。その内訳は（拓本は紙綴で括られて9つに束ねられ、各々に洞の名が記されている）、老君洞135枚、薬方洞55枚、火烧瑤56枚、萬佛洞51枚、小洞73枚、敬善寺102枚、孝昌瑤大小五洞86枚、大洞蓮花洞80枚、大洞108枚である。

同じく目録に「龍山石刻」とのタイトルで載せられていた44枚も龍門石窟のものであり、著名な「伊闕仏龕之碑」（唐・貞観十五年（641））が含まれていた。一方、目録編纂時に一点一点封筒に入れられて整理されたものも66点ある（内1つは同じ造像記が2枚入っているため合計67枚）。加えて、貴重図書室展示ケースにある造像記が2枚。

未整理分から造像記と判断されるものとしては、山東省臨淄県出土の北魏・正光六年（525）の「弥勒下生像趺石拓本」1枚、未詳のもの3枚が新たに見つかった。

【4. 墓誌銘】

北魏から隋唐時代の墓誌銘（墓中に入れた方形の石で、故人の伝記を刻まれる。厳密には墓誌「銘」はその末尾の韻文。上にかぶせる部分を「蓋」といい、多くは篆書で刻まれるため「篆蓋」と呼ばれる。）で46枚が確認された。そのうち目録編纂時に一点一点封筒に入れられて整理されたものは29枚。未整理分からは隋唐時代の墓誌の「蓋」の拓本の

み 17 枚が見つかった。拓本の状態は良好である。墓誌本体と蓋の照合が必要である。ほぼすべてが原拓だが、『石濱文庫目録』写真の部、図版「晋趙府君墓東闕」（「目録 A」（p.437 上の左右）「目録 B」（p.435 上））は複製であるため、11. 複製（影印など）に入れた。

【5. 刻経】

儒教・仏教・道教の経典を刻んだものをここに入れる。仏教の経幢もここに入れる。

(1) 儒教：

西安碑林に原石が存する著名な唐代の「開成石経」（開成二年（837））の十二経すべてが揃っていると思われる。原拓で拓本の状態は良好である。「尚書」10 枚、「周禮」18 枚、「儀禮」21 枚、「春秋経傳集解」67 枚、「春秋公羊傳」16 枚、「春秋穀梁傳」17 枚、「論語」7 枚、「孝経」1 枚、「禮記」「周易」「毛詩」「爾雅」の枚数は確認途中である。

なお、三国の魏の「三體石経」（正始石経）の残片の拓本が各点複数見つかったが、複製である可能性が高い。

(2) 仏教：

陀羅尼などを刻したもの。既整理分から 2 枚、未整理分から 11 枚がここに分類され、いずれも原拓。後者には経幢二基の図解が添えられた 8 枚の拓本もある。本の石面が荒れていたためか字が判別し難いものもあり、いずれもまだ特定できていない。拓本の状態はほぼ良好である。

(3) 道教：

未整理拓本の中から「唐玄宗御注道德経」（唐・開元二十六年（738））6 枚が発見された。本来 8 枚で一揃いであるはずのもので今後も注意したい。拓本の状態はほぼ良好だが、一部破れと劣化がある。

【6. 非漢字刻文のものを含む石刻群】

点数は多くないが、石濱博士の学問の特徴を表すまとまりである。

(1) 契丹（遼）

契丹文のものと及びそれに付随・関連する漢文のものも入れる。慶陵（現在の中国内蒙古自治区巴林左・右旗近傍）から出土した遼の最盛期の皇帝・道宗と宣懿皇后の契丹文・漢文両方の哀冊（墓誌に当たる）と篆蓋、合わせて 5 枚の原拓である。大連にあった法帖・拓本の専門店・右文閣からの封筒（昭和九年（1934））に入れられ、闕鐸「林西遼陵石刻出土記事」、拓影 2 点（「遼道宗宣懿皇后哀冊文」第一 漢文、「遼道宗宣懿皇后哀冊文」第二 契丹文）、「遼道宗宣懿皇后哀冊文」摹写与釈文（一部分）が付されていた。

ほかに契丹文字が浮き彫りになった鏡の拓本が 1 枚。いずれも拓本の状態は良好である。

(2) 西夏

表裏に西夏文・漢文が刻まれた「重修護国寺感通塔碑」（西夏・天裕民安五年（1094））の両面の原拓が確認された。西夏文は採拓状態の異なる拓本が2枚あるので、合計3枚である。内藤虎次郎（湖南）から石濱宛の封筒が付随し、中には石濱による西夏文字解読作業メモ2枚が入っていた。なお、この碑は中国甘肅省武威市の文廟に現存するという。

(3) 女真（金）

女真文のもの及びそれに付随・関連する漢文のものも入れる。「大金得勝陀頌碑」女真文面の碑身拓本1枚（大連・右文閣の封筒に入れられている）と、その女真文面碑額1枚、漢文面碑額1枚。「宴臺國書碑」（女真文）の碑額・碑身合わせた拓本1枚、碑額のみ1枚、碑身のみ1枚。「奥屯良弼餞飲碑」（金・泰和六年（1206）。漢文＋末尾に三行の女真文）1枚。未特定の女真文拓本1枚。合計8枚、すべて原拓で状態は良好である。

なお、貴重書庫での調査中、渡辺薫太郎寄贈の女真文拓本1枚も確認された。

(4) モンゴル（元）

モンゴル文のもの及びそれに付随・関連する漢文ほかの言語のものも入れる。この分類に属する拓本については、2005年度の調査報告「石濱文庫の拓本資料——概要とモンゴル時代拓本一覧」に載せた（注2参照）。9タイトル、24枚が確認されている。内訳は本報告「2005年度（平成17年度）の調査・（3）貴重書庫内での調査」を参照されたい。すべてが原拓である拓本の状態はものにより異なるが、大きい拓本に破れや皺、劣化が多く認められる。

八「勅賜大司徒寿公碑 篆額」1枚、九「房山十字寺石刻」6枚が未整理分からの発見であるほかは既整理分で目録にも載っているが、題名を適切なものに改めた。

2005年度の報告以降、七「莫高窟造像記」1枚が確認され、八「勅賜大司徒寿公碑 篆額」（「勅賜皇元大司徒筠軒長老壽公碑」）が上都に存した華嚴寺の長老であった惟壽の碑であることが判明した⁴。

(5) 満洲（清）

満洲文のもの及びそれに付随・関連する漢文・モンゴル文のものも入れる。

満洲文字の改良者ダハイ（達海）の満洲・漢・モンゴル三体の碑拓（清・康熙四年（1665））4枚、「御書彙集寺碑文」（康熙十三年（1674））満洲文・漢文の計2枚、「御製善因寺碑文」（雍正九年（1731））1枚が確認された。未特定だが満洲・漢・モンゴル三体の碑（康熙四年？）1枚、満洲文の碑額1枚があり、この分類全体で9枚である。すべて未調査分からのもので、拓本の状態はおおむね良好である。

【7. その他の石刻】

上記1～6の分類に入らないことが明確な石刻拓本をここに入れる。この中で著名なものは次の二つである。

「龍藏寺碑」（隋・開皇六年（586））、額・碑陽・碑陰各1枚、碑側2枚、別に碑陽のみ1枚、すべて原拓の合計6枚。碑は河北省正定の隆興寺に現存する。書道史上、指折りの名品である。未整理分からのもので拓本の状態は良好である。碑陽のみの1枚は、当時北京滞在中の武内義雄（中国哲学・後に東北帝国大学教授）から石濱に宛てた封筒（昭和九年（1934））に入れられていた。

「南詔德化碑」（南詔・賛普鐘の十四年（765））、碑陽・碑陰の計2枚。7～10世紀初に現在の中国雲南にあった国家・南詔の数少ない碑刻の一つとして著名である。拓本の幅172cm（縦は大きすぎて広げられず。3mばかりあるという。）もある巨碑である。原拓であるが、碑面の剥落が多いためもあって皺が多く、若干の痛みがある。既整理分の拓本であったが、碑陽は唐蕃会盟碑にまがう「陀羅尼經幢漢梵吐蕃會盟碑」と題され、碑陰は「無評価」とされ別々に置かれていた。本年度の調査で一碑の両面と判明した。

ほかに既整理分から7枚が確認されたが、上の二つに匹敵するほどのものではない。

【8. 印・硯・鐘銘ほか石刻以外】

未整理分からパスパ文字をふくむ印譜1枚、漢・パスパ・満洲・西夏文のものを含む印譜20枚、硯譜3枚、鐘銘三種からの4枚がいずれも原拓が確認された。既整理分からは「故宮博物院古物館傳拓」の封筒に入った「新嘉量」「散盤」の拓本をここに入れた。これらの特定作業はまだ行っていない。

【9. 日本金石文】

古代から明治・大正まで幅広い時代にわたる。既整理分から14枚、ただし複製品も混じるようである。未整理分からは5枚。この中には江戸時代の著名な儒者・伊藤東涯の墓碑も含まれる。これらの特定作業も残されている。

【10. 未詳・不明（分類すべき場所が分からないもの）】

上記分類の何れに入れるかが判明していないものをここに入れる。およそ5点。大きな穴が開いたり、痛みが激しいため広げることが難しいものがある。

【11. 複製（影印など）】

明らかに原拓ではなく、複製品と判断されるものを入れる。上記分類の中からも今後ここに移されるものが若干出てくるだろうと思われる。

既整理分からは「古刻萃珍第一集」（中国の金佳石好樓から出版された石印版⁵）の10点ばかりをここに入れた。

【今後に向けて】

以上は2006年10月30日までの調査中間報告である。1300枚もの拓本一枚一枚の整理特定にはなお多大の時間と労力を要することは確かである。「石濱文庫」拓本資料の価値

からすれば、今後も調査・整理・研究をすすめ、公開による活用を目指したいものである。

2005 年度の調査報告「石濱文庫の拓本資料」（『大阪外国語大学附属図書館報《Library Information》』第 18 号，貴重図書紹介（1），2006 年）の末尾に筆者は「研究プロジェクトを組んだ総合的な調査を望む」と書いた。一人の手による調査・整理に限界を感じたためであると同時に，貴重書庫での調査の中で拓本資料以外にも，写真・ノート等の資料類・書簡類などが未整理ないし整理途上であることを見たためである。

そこで，それらの資料に関係する先生方にご協力を依頼し，2007 年度（平成 19 年度）科学研究費補助金を申請し，拓本資料以外も含めた未整理資料の調査・研究を進めることにした。無論，採択されればのことだが，最後にその研究プロジェクト名とその目的を申請書から引いて，今回の報告を終えたい。

「漢学と東洋学の間——石濱文庫資料の総合的調査・研究」

「本研究課題は，大阪外国語大学附属図書館が所蔵する東洋学者・石濱純太郎（1888～1968）の全蔵書・研究資料（以下「石濱文庫」）の 10000 点近くに及ぶと考えられる未整理資料を調査・研究し，公開・保存のありかたを探る。また既整理資料約 43000 点，及び彼の著述と合わせて，石濱の学問の成立背景と継承のありかたから日本のアジア研究の特徴を探り，歴史学・言語学を中心とした今後の日本からのアジア研究の発信のありかたを考察することを目的とする。

- 1 この中には以前『大阪外国語大学附属図書館報《Library Information》』第 15 号（2004 年 3 月）で紹介した中川忠英『清俗紀聞』十三卷（明治初期の後印本と思われる）もある。
- 2 『13,14 世紀東アジア史料通信』第 6 号，（科学研究費補助金基盤研究（B）13,14 世紀東アジア諸言語史料の総合的研究 元朝史料学の構築のために，研究代表者 森田憲司奈良大学教授）pp.1～8，2006 年。筆者も参加する，この科研プロジェクトの研究会（2005 年 12 月 24 日龍谷大学大宮学舎）で石濱文庫の拓本資料について報告したものに基づく。森田先生はじめメンバーの方々のその際及びその後にいただいた御助言に感謝したい。本報告も当プロジェクトの成果としての性格をもつ。
- 3 『大阪外国語大学附属図書館報《Library Information》』第 18 号，貴重図書紹介（1），2006 年。
- 4 石田幹之助「元の上都に就いて」『東洋文化史叢考』（財）東洋文庫，1973 年，pp.581～583
- 5 坂田玄翔「清末・民国時代の影印本について」『季刊・墨スペシャル』21 号，芸術新聞社，1994 年，p.179

（2006. 11. 9 受理）